



SOTO ZEN JOURNAL

DHARMA EYE

News of Soto Zen Buddhism: Teachings and Practice

ご挨拶 p1
ゴッドウィン建仁

北アメリカ国際布教の現在 p2
マクマレン壊淨

南アメリカにおける禅の全体像について p4
大城仙芳

ヨーロッパにおける禅布教の状況 p8
ロベール香蓮

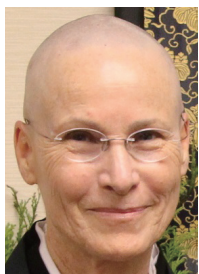
坐禅への脚注集 (22) p10
藤田一照

法
眼

Number

49

March 2022



ご挨拶

所長 建仁ゴッドウィン
曹洞宗国際センター

アメリカ合衆国カリフォルニア州のサンマテオを拠点とする曹洞宗国際布教センターの所長を務めているゴッドウィン建仁です。挑戦と可能性に満ちた新たな年度を迎えるあたり『法眼』読者の皆様にご挨拶を申し上げます。今年も多くの命を奪い、苦難を強い、混沌と混乱を招いてきたコロナウィルスの世界的感染と向き合いながらのスタートとなりました。

皆様がこの難題を切り抜ける道を見出し、僧侶と檀信徒が一丸となって創意工夫をしながら参禅に勤め、さらに新たな入門者が歓迎され禅に臨まれることを願っております。困難に直面しながらも、現状を、ありのままに見つめることでチャンスは生まれてきます。前に歩みを進める唯一の術は、共に力を合わせ協力し合いながら悟りを深めることです。私たち皆が抱える課題は、共に努力をし合うことによってしか解決することができないということに、より多くの人達が気付き始めているように思います。仏教の基本である縁起は、意味のない努力など皆無である（すべての努力には効果がある）という道理を説いています。

曹洞宗国際センターの一員として、各地にある多くの禅センターや寺院を訪問しておりますが、この縁起について深い理解が示され、異なる禅センターが創意工夫をしながら繋がりを保とうと努力をしています。このような良い循環

の中で、世界の傷を癒やそうと努める活動、それらが、グループ相互の糧となり癒しとなっています。他者を手助けする努力は、必ずしも目に見えませんが、強力なかたちで、他者からの手助けとして私たちは受け取っているのです。

曹洞宗の精神と合致する持続可能な開発目標（SDGs）についてですが、今年は海に目を向けています。海は、偉大なる寛容のシンボルですが、私たちが気を配り思いやりを持たなければならぬ存在でもあります。海は、地球の全ての糧を育んでいます。私たちもまた身近にある海を大切にしなければいけません。

今年は、北アメリカ国際布教100周年記念という素晴らしい機会に恵まれた年です。1922年（大正11年）ロサンゼルスにて産声を上げた両大本山別院禅宗寺の100周年を祝うため、全米各地で準備を進めております。禅宗寺の檀信徒の方がたが、第二次大戦の渦中でさえも門戸を開き続ける努力をされたことに対し、北アメリカの寺院の全ての信徒が、深い感謝の念を抱いていることを、各地を訪問しながら感じております。禅宗寺があったおかげで素晴らしい禅の指導者が渡米され、彼らは日系アメリカ寺院の檀信徒を支え、更なる努力を重ね大陸各地に仏法を伝道していきました。

私たちの一人ひとりの努力は、御開山や創立者らに対する深い感謝を表しているといえます。ぜひ、北アメリカ国際布教100周年記念行事にご随喜、ご参加いただけますようお願い申し上げます。最後に、コロナウィルスの世界的感染拡大によって、思いがけない形で気がつかされたように、私たちは皆繋がっています。願わくば、縁という不思議に感謝しながら、海、樹木、

衆生の一切の御教えに耳を傾けんことを。

合掌



北アメリカ国際布教の現在

マクマレン 穰浄

北アメリカ国際布教総監部書記

令和4年は、北アメリカ曹洞宗の100周年を記念する年となります。1922年（大正11年）、カリフォルニア州ロサンゼルスに両大本山別院禅宗寺が創設され、北アメリカ曹洞禅の出発点となりました。

この一世紀の間に、北アメリカの曹洞宗は多くの慶事同様に、多くの課題にも直面してきました。各寺院や我々個々人の命には、環境の如何に関わらず、一筋の線が通っています。この一筋の線は、私たちの仏祖を通して菩提樹の下で正身端坐された釈迦牟尼仏に至るまで綿々と連なっており、私たちの功績も課題も、すべてがこの繋がりの一部であり、それぞれが、曹洞禅にとって極めて重要なものであるのです。北アメリカ曹洞宗100周年という記念すべき瞬間に、私たちは立ち会い、多くを祝い讃えんと共に、多くの課題に臨んでいくこととなります。

コロナウィルスの世界的感染拡大にも関わらず、北アメリカの寺院は活力を保っています。この2年間、コロナ禍にあって幅広い手法を模索

しながら歩みを進めて来ました。檀信徒が仏法に触れ、コミュニティの輪を感じてもらえるように、オンラインのビデオ通話などの機能を活用していく中で、それぞれの寺院が大きな躍進を遂げました。コロナ以前のように、自由に集えるときが来るのを楽しみにしておりますが、以前と全く同じになることはないでしょう。コミュニティや伝統についての私たちの価値観も変わるでしょう。多くのお寺がパンデミックを通して参加者の増加を経験しました。これは、遠隔で参加ができたという利便性に一部起因していますが、それよりも重要なことは、北アメリカにおいて、静けさや黙照の本質がいかに大切なことか人びとが気づき始めているということです。

シンプルな坐禅に、多くの北アメリカの人びとが想像力を掻き立てられ、魅了されたということがありたく感じます。様々な層の人びとの間で瞑想は常に関心事となっており、私のお寺に訪れる人たちは、瞑想に関心があるが故に来た人たちがほとんどです。坐禅を紹介することを通して仏教について知ってもらえるのは素晴らしいことです。そのような人たちは、意欲は高いものの「瞑想」がどのようなものかぼやけた印象だけを持っています。メンタルヘルスの為の一つの運動としてある瞑想として捉えるのではなく、仏祖との繋がりに触れることによって、彼らの感性は、より奥深く微かで妙なる肝要なものへと開花していきます。この「核心」「坐禅の核心」「仏祖の核心」「妙なる涅槃の核心」こそが、釈迦牟尼仏、道元禅師、瑩山禅師の弟子である私たちすべての命にもこの一筋の線が通っています。北アメリカでは、このような類の正真正銘の繋がりや、そのような繋がりを重んじ育む伝統が求められています。

ここ数年間に渡る北アメリカの政治的混乱によって、困難にありましたが、曹洞禅のコミュニティの北米社会における役割が醸成する一助ともなりました。長年、北アメリカ寺院のコミュニティは社会問題から距離をとる傾向がありました。政党や特定の候補者の支援に参加することはできますが、より大きな社会の一員であるならば、社会問題に対する自分たちの見解を表すことが大切です。多くの寺院は、北アメリカの法体系や慣習の中における自らの役割を深く探求しています。私たちが掲げる価値観には、つねに社会的なニュアンスが含まれており、寺院を政治色に染めてしまう畏にかかることなく、価値観を表すことができるよう努めています。最近では、多くの寺院が、人種や社会公平、移民問題、環境問題について発言をし始めるようになりました。今日の実際的な社会問題に仏法の智慧を巧みに適用する術をわたしたちは模索しているのです。

北アメリカの寺院コミュニティは、規模においても成熟度においても成長をしており、強固な中央組織の必要性は以前より高まってきました。日本の曹洞宗と繋がりのない寺院や僧侶が多くいます。多くの北アメリカの宗侶は、Soto Zen Buddhist Association (SZBA) と呼ばれる米国内の僧侶団体のメンバーですが、一方で、北米において曹洞宗の伝統を護持し導いていく組織が求められています。最初の100年間、北アメリカの曹洞宗は、日本の曹洞宗の教えを護持し、寺院を建立し、人材を揃えるために派遣された開教師（国際布教師）によって温かく慎重に守られてきました。北米社会に送られた多くの僧侶は弟子を育成し、その弟子たちによって今日の北アメリカの寺院が建立されてきました。他方で、多くの僧侶が日本で研鑽を積み、新しい

コミュニティを形成するべく北アメリカに戻ってきました。北アメリカの曹洞禅が、自分たちのルーツである日本と深い繋がりを保つことは極めて重要です。しかしながら、多くの寺院や僧侶にとって、曹洞宗の組織形態やシステムとの間には距離があり、太平洋を越えた北米の生活圏に取り入れることは困難です。

このような状況に応じるかたちで、国際布教師からなる北アメリカ総監部（現地法人名 Association of Soto Zen Buddhists (ASZB)）は、曹洞宗の活動を独立して継続していく組織の発足に取り組んできました。私たちは、この組織を「Soto Zen North America（北アメリカ曹洞禅）」と命名し、日本との繋がりを強化し、北アメリカにおける曹洞禅コミュニティ間の関係を拡大し、曹洞禅の仏道修行と理解の深化を図っていくことを目的に掲げています。独立組織と言うと、北アメリカ曹洞宗と日本の曹洞宗があたかも乖離していくように聞こえるかもしれませんが、実際には、このような独立によって、北アメリカの曹洞宗が本当の意味で発展していくことができ、長期的な関係を醸成していくことができるのだと思います。

北アメリカ曹洞宗の次の100年は、すでに始まっています。私たちの先達によって植えられた種は芽を出し、成長を遂げており、その芽や茎、幹や枝は開かれた空間へと伸び続け、受ける光に応じて自らの道を模索しています。法雨は途切れることなく優しく降り続けています。



南アメリカにおける禅の全体像について

大城仙芳

アルゼンチン共和国 南禅寺

なんぞ自家の坐牀を抛却して、みだりに他国の塵境に去来せん。

もし一步を錯れば、当面に蹉過す。

道元禅師『普勸坐禅儀』より

歴史

1903年、上野泰庵師が曹洞宗の開教師としてペルーの沿岸部にあるセロ・アスール村に到来し、耕地や鉱山、農場で労働していた日系移民とその家族のために各地を巡りました。1907年、日系家族の助けを得て、上野師は、南アメリカ最古となる泰平山慈恩寺を建立し、1908年には、日系移民の子どもたちの為に学校を開校し、この学校は現在に至るまで公立小学校として役割を果たしています。



Libro “La Memoria del Ojo”

Para un(a) infantil, reverendo Ueno recitando Sutra(Okkyo), antes de partir el cortejo fúnebre desde Templo Jionji. No está utilizando ataúd, encima de cuna, su cuerpo está envuelto en la sábana. Fue tomada en los alrededores de 1910.

慈恩寺での子供の葬儀、その出棺前。棺が使われず、寝台の上の遺体がシーツにくるまれている。導師は上野師。明治末年ごろ撮影



2003年（平成15年）には、南米曹洞宗100周年を祝うこととなりましたが、当時の慈恩寺に住職はおらず活動も停止していたため、南米における曹洞宗の布教活動はそこから再開しなければなりませんでした。2013年（平成25年）、南米曹洞宗110周年記念の法要の折には、慈恩寺はすでに大城慈仙師の指導の下で日系社会との関係を回復、維持しており、この際、僧侶や教師らがリマ宣言に署名をしました。そこで、私たちは協力をしながら禅の教えの布教、伝道に努め、南米大陸のグループやサンガの間で区別することなくコミュニティ全体の興隆のために交流を図っていく合意を交わしました。

“ラテンアメリカ禅の集い”

こうしたイニシアティブをきっかけにしてスタートしたのが“ラテンアメリカ禅の集い”でした。伝統、流派、国籍、宗教、在家、出家のすべてに寛容で理解のある独立したサンガのグループ、寺院、参禅者協会等によって計画され、その中には南米曹洞宗の僧侶もいました。“ラテンアメリカ禅の集い”を曹洞宗の国際布教師として毎年準備、開催する経験を通し、南米大陸の各地から来る研究者や音楽家、現地のリーダーたち、仏教徒も非仏教徒も含まれ、あらゆる

る年齢や社会的地位の在家者や聖職者と出会うことができ、彼らと共に禅を実践する機会をいただきました。

南アメリカの仏教徒とは？

南アメリカ大陸の人口は、4億2千4百万人であり、その90パーセントはキリスト教徒です。仏教を信仰したり、自らを仏教徒と呼んだりする人たちの割合は1パーセントを遥かに下回っており、興味深いことに日本やアジアの対蹠地にあることから、文化的に非常に大きな障壁があります。20世紀を通して南アメリカに建立された仏教寺院のほとんどは、葬儀や先祖供養の法要を行うために韓国や中国、ラオス、日本などから来た移民によって建立され維持されてきました。大多数は伝統的チベット仏教を信仰し、次いで大乘仏教の中国禅、韓国禅、日本の曹洞宗と臨済宗を含む禅宗が大きな割合を占めています。

禅宗の中で、曹洞宗は最も古く、宗門組織としての存在感は南米大陸において群を抜いています。しかし、曹洞宗と関係を持っていなくても道元禅師によって伝わる只管打坐を実践するグループやサンガが数多くあります。武道場、療養、保険、教育機関、キリスト教や仏教以外の宗教教団、弟子丸泰仙老師と関係のあるサンガ、単立の禅組織、書籍やビデオなどから個々に勉強する人びとのグループ、曹洞宗僧侶と共に禅の活動に従事している人たちです。

南アメリカの曹洞宗と関係のあるコミュニティを簡単に説明すると、大まかに分けて2つのグループがあります。

(A) 日系寺院の檀信徒家族。法事や社交を目的として寺院に来ており経済的に寺院を支えているが、一般的に坐禅をすることはない。

(B) 仏教徒以外で非日系の在家参禅者。坐禅や摂心などの活動に家族とは別に個人単位で

参加し、場合によっては、経済的に協力をしたり、ボランティア活動をしたりしている。



全体像

アルゼンチンやペルーで葬儀を執行中、個人的に経験してきたことですが、(A)の人口は祖父母世代や高齢者が他界をするなかで減少しており、新しい世代は日本語を話さず、伝統について関心を示すことはありません。若い家族が仏壇をどう処分したらよいか相談しに来ることも頻繁にあります。一方、(B)については、禅センターや定期か不定期に坐禅をするグループが徐々にではありますが増加を見せています。より多くの人々が在家信者や修行僧として受戒をし、南アメリカでは三代目となる僧侶が増えてきています。南アメリカでは、ほぼ半分の曹洞宗寺院が、地元の僧侶、在家参禅者による支援、寄付金、勉強会や参禅会、イベントへ、書籍やアクセサリーなどの売上、その他の活動によって維持されています。

現在

“ラテンアメリカ禅の集い”は、コロナ禍の期間も含めて8年連続で後者である（B）グループからの関心を集め、更に彼らの関心は高まっています。異なる国や文化から成る独立したグループのボランティアと資源が限られている中、会議を催すことができました。ここから分かったことは、ほとんどの参禅者は、曹洞宗の存在や機能、組織について知らず、日本人僧侶や日系家族に属するものとしてしか見ていません。また、曹洞宗やその教えに歩み寄ったり、学ぶ必要性を感じなかったり、自分たちの都合に合わないと考えたり、法式や宗門に関連する事柄を拒絶したりする者もいます。

その為、曹洞宗の僧侶は禅を紹介する際、教義や宗旨について話をしたり、一般の人たちや特にメンバーの方がたに坐禅を経験したりしてもらうことが重要となります。また、様々な流派や伝統の禅の指導者らが対話をする場にもなっています。異なる宗教や文化を背景に持ち、学術分野や芸術分野、行政機関、NGOなどから来る指導者らとの対話は、他の社会と繋がりや輪を広げていくきっかけとなっています。こうした繋がりを通して、私たちは自分たちが置かれている現状を理解し、新たな構想を見ることが出来ます。

所感

粗雑な分析かもしれませんが、フランス法王の言葉を言い換えて表現するならば、葬儀や供養など、死に関する事柄にのみに関わるお寺の「敬虔な組織」としての役割の限界を如何にして超え、他方で、南岳磨甄の如く坐蒲の上でただ坐っている禅の瞑想クラブのようなステレオタイプを如何にして超えていくかが、課題であるのだと思います。

師匠の例に倣い、檀信徒のための法事とサンガ入門者のための坐禅を共に行じていく中で、日々の生活の中で仏道修行を醸成していく機会を提供する努力をしています。お仏壇のご先祖様にお茶を供えることも、禅堂の文殊菩薩にお茶を供えることも同じように。

僧堂

「僧堂生活は、24時間途切れることのない修行、即ち、行持と言われており、坐禅、作務、他者との面会、法要において仏祖の道に倣い行じていくことを意味します。」

俗世で、私たちが仕事をしたり、勉強したり、家族の世話をしたりと、複数の職業を持ってみても、このような修行を完全に醸成することはできません。僧堂という空間だからこそ、自然と修行は方向付けられ、整えられていきます。

「なんぞ自家の坐牀を抛却して、みだりに他国の塵境に去来せん。」

外国人の修行僧を専門僧堂に送ることについては、また別の記事の中で触れられたらと思います。しかし、次世代の南アメリカの僧侶を日本に数ヶ月、数年間送ることが経済的、時間的、文化的な壁によりいよいよ困難になってきていることも事実です。

コミュニティ

「もし一步を錯れば、当面に蹉過す」

適切に僧侶や尼僧を育成することができる僧侶のコミュニティを、根気よく、賢く、自分たちの実状に合うように醸成していくことが必要であると私は思います。寺院や僧堂を設ける必要があり、在家信者や支援者に支えられ、修行や坐禅のために指導者や徒弟を支え、集まることのできる曹洞宗のサンガの存在はラテンアメリカにおいて不可欠です。誤った一步を踏むこ

とがないよう、僧堂経験や教養の面で資格を有する禅師や指導者、教授らが、コミュニティの布教活動の計画、調整、管理、教育、監督、指導において必要とされているのです。



目標と課題

現在に至るまで、歴史と人員、修行方法、運営能力、活動範囲や資源を兼ね供えた組織は、南アメリカでの布教活動を通して存在する曹洞宗のみです。しかし、現在のこの南アメリカ曹洞宗は、日本という特定の人間社会の実状やニーズに沿って形成されています。南アメリカに住む者として、解決策を他国に期待することにはできないと思っています。ルーツに頼ることは必要なことですが、そのような先鞭は、この地に生まれ死んでいく僧侶が、献身し尽力してこそ実りあるものとなるのだと思います。

どのようにして？

このテーマに関しては、ヨーロッパとアメリカにおいて様々な観点や争点から幅広い議論が交わされています。集会を通して全体的なサングの醸成を図ろうとしている者もいます。この路線における小さくも大きな一歩として、檜崎通元老師によって書かれた瑞応寺専門僧堂の

手引英語版が、2011年に出版され、その後ポルトガル語版が出版されました。そして、まもなくスペイン語版も出版されます。この最新版は、日本の瑞応寺の協力ならびにコロンビアとペルーから有志で協力、出資をしてくれた人びとのおかげで完成させることができました。この手引は、2023年（令和5年）ペルーの慈恩寺にて南アメリカ曹洞宗120周年記念慶讃法要の際に贈呈されます。目的は、儀礼主義の導入ではなく、菩提心の護持にあります。

より多くの南アメリカの僧侶が道元禅師に倣い正伝の仏法を伝道し、瑩山禅師に倣い、それをあらゆる聴衆が親しめるよう布教し、それによって、和合しあいながら仏法修行をしていくための環境を創造していくことが大切です。

南アメリカ曹洞宗は120年の歴史を刻みますが、まだまだ模索していかなければならないことが多くあります。そこに到達することができたとき、この点で、おそらく私たちは何らかの貢献ができるのかもしれませんが、仏法が充満し一切の衆生に功德が及ぶことを願っております。





ヨーロッパにおける 禪布教の状況

ロベール香蓮

フランス共和国 シャトレ禪道場

僅か50年余りの間に、北はノルウェー、南はスペイン、西はポルトガル、東はポーランドまで、禪はヨーロッパ各地に広がりました。1967年、禪の修行は、弟子丸泰仙老師がパリに到着したことをきっかけとして、ヨーロッパに根付きました。アメリカにおける禅僧とは異なり、老師は、日系コミュニティの世話をする為に来たわけではありませんでした。弟子丸老師は禅の実践や哲学を西洋に広めるという自身の開教の志をもって自発的に来られました。

弟子丸老師は、型にはまった僧侶ではありません。弟子丸老師は凄まじいカリスマ性と揺るぎない活力、確信、そして人間性と禅の伝統、極東の文化の知識を兼ね備え、15年間に及んだ師の布教活動は大きな成功を収めました。パリを拠点として、教えを西ヨーロッパに広め、坐禅の修行を確固たるものとして確立し、膨大な禅の書物を翻訳し、法式や経典を紹介しました。弟子丸老師の手によって、ヨーロッパ各地に100を超える禅堂や参禅者のグループが創立され、1979年にフランスのロワール地方に禅堂尼苑も創設されました。1976年にはヨーロッパ初代開教総監に就任し、それ以来、多くの日本の代表団が訪れ、数名の若い日本人僧侶が老師の補佐をするために渡航いたしました。多くの弟子が老師の下に集まり、500名を超える僧侶や尼僧が老師の下で出家得度をし、一時は2万人もの人たちが老師と共に参禅をしたという話があ

ります。1970年にヨーロッパ禅アソシエーションが創設され、それが1979年には国際禅アソシエーション (IZA)となりました。1982年に弟子丸老師が遷化されてから40年経った今尚、老師が残された面影や活力は大いに息づいており、ヨーロッパにおける禅のあり方を根底から支えています。

弟子丸老師は1982年に遷化されるまで弟子を育成しましたが、伝法はされませんでした。その後数年間、数名の弟子が、特に成田秀夫老師と丹羽廉芳禅師の下で嗣法をしましたが、状況はいささか混乱しており、日本の伝統、伝法、曹洞宗との関わりについてどうしていくかといったことについては、それぞれに違う選択をするようになっていきました。20年ほどの間、ヨーロッパ曹洞宗には国際布教師のための総監部はありませんでした。

ようやく1990年代末から事情が明らかになり、弟子丸老師の弟子で指導者となった者たちのほとんどが日本に戻り、様々な日本人指導者の下で嗣法をしました。その他のヨーロッパ人は大本山永平寺、大本山總持寺、總持寺祖院、永平寺別院、愛知専門尼僧堂、安泰寺などの寺院で修行をし、嗣法も行ったため、ヨーロッパには日本人僧侶の法系を継ぐ僧侶が多くいます。さらに、米国からの法系も存在します。2002年以降、ヨーロッパ総監部が当初ミラノに創設され、その後パリに移転したことで、こうした異なる法系の間でつながりが生まれました。禅堂尼苑にて総監部が主催する現職研修会には、和尚の法階にある僧侶や教師資格を有する僧侶、国際布教師の任命を受けた僧侶らがヨーロッパ中から集い、こうした機会を通して出会い、互いを知り、交流を図るようになります。各地の

寺院で行われる法戦式や晋山式もまた定期的に僧侶同士が集まる機会となり、また、海外で初めて行われた南澤禅師が戒師をされた2016年の禅堂尼苑での授戒会と2019年の観照寺での授戒会の2度の授戒会、追悼供養法要も同様に僧侶が集う機会となりました。

今日、二代目の指導者となる僧侶は一般的に伝統的な曹洞宗の教育課程に沿って、主に、日本の岡山県にある洞松寺にある僧堂に安居をします。曹洞宗宗務庁が主催する宗立専門僧堂が、2007年と2008年に禅堂尼苑にて開かれ、そこには奥村正博師も立ち会いました。しかし、それ以降は、僧侶の修行の為に各地の寺院で行われた安居はまだ曹洞宗に正式に認められてはおりません。現在、ヨーロッパの数か所に曹洞宗寺院があり、その中には農村部にある僧堂のような種類の寺院や、都市部の寺院があります。古海寺と龍門寺の2ヶ寺は、大本山總持寺の直末寺院であり、普伝寺と観照寺の2ヶ寺は、大本山永平寺の直末寺院です。しかし、これよりも大きな禅センターや禅堂は多く存在しています。

更に、坐禅と簡素な法要をしつつ、独立した流派としてのヨーロッパ禅を独自の形で確立するために、曹洞宗やその規定やルールから自主的に距離を置くグループも多くあります。曹洞宗に所属する指導者の僧侶もいれば、所属していない僧侶もあり、進退や法式はほとんどか同じであっても将来的に混乱や課題が生まれる危険性があります。

実際には、ヨーロッパにおける禅を構成しているのは、各都市の隅々に広がる小規模な参禅グループ、それぞれ別々に参禅をする個人、更には、僧侶や尼僧、指導者（65名の教師、52名

の国際布教師）によって運営される数十もの禅堂や大きな禅センターや数カ所にある寺院です。このような凡ての人びとや場所は、概ねネットワークを通して組織され、曹洞宗に属していてもいなくても寺院や教師を結びつけています。弟子丸老師によって創立された国際禅アソシエーションが、おそらくは最も重要な組織であり、1100名以上のメンバーと9カ寺、9つの禅センター、73カ所の禅堂、129グループが属しており、更にはドイツ、イタリア、ベルギーなどにも他にこうしたお寺やグループがあります。

流派や組織に加え、異なる言語や文化をもつ国々の間には非常に大きな多様性がありますが、それでも、黒衣をまとい、袈裟を縫い、禅の経典を読み、伝統的な法式に倣い、日本語の発音で経典を頻繁に読むことのできる坐禅道場を持つヨーロッパ禅は、一定の団結を図ることが可能であると思います。一般的に、ヨーロッパの禅グループは、社会的問題には特別に関心はなく、政治的な問題にも関与することはありません。また、多くの他のマインドフルネスの類のグループとは異なり、状況にあった形で伝統的な形式に沿っていくことを望みます。

この2年間は、コロナウィルスの世界的感染によって状況は明らかに複雑になっています。ビデオ会議形式で法話をするグループもあれば、していないグループもあります。差し当たって、このパンデミックが終息し、第二世代の指導者たちが日本で再び修行をし、再び瑞世を行い、教師の数が増え、そこから禅の活力を示していくことができるようになることを願っております。



坐禅への脚注集 (22) くつろぎのなかで 思いに出会う(2)

藤田一照

(承前) この経典は『中部経典』(マッジマ・ニカーヤ)のなかの第二十経で、日本語の題名は『考想息止経』となっている。「考想」を「息止」することを説くお経、という意味である。この経典の英訳をさがしてみると、二種類見つかったのだが、面白いことにかなりニュアンスの異なる題名がつけられている。一つは、The Removal of Distracting Thoughts、もう一つは、The Relaxation of Thoughts となっている。前者は「注意をそらせるような思考の除去」、後者は「思考のくつろぎ」という意味である。前者の訳者が思考に対して否定的な立場に立っていることは明白で、このお経がある特定の瞑想対象(この経典で「主題」と呼ばれているもの、例えば、呼吸とか身体感覚)に対して持続的に注意を注ぐという作業を邪魔するような思考をどう取り除くかについて釈尊が説いているという理解に基づいて訳出している。

ここでわれわれが気をつけなくてはならない点は、思考について否定的な立場からの前の訳においてさえも、あらゆる種類の思考を除去しなければならないというような無茶なことがこのお経のなかで主張されているのではなく、除去の対象はあくまでも「欲望や瞋りや癡(おろか)さを伴う、悪しき、不善な思い」という限定条件付きの思考に関してだけだということがはっきり述べられていることである。もしここに、われわれのすべての思考には「欲望や瞋り

や癡さ」が伴っているから、どんな思考であってもそれは「悪しき、不善な思い」なのだという粗雑で全体主義的な考えが入り込んでくると、あらゆる思いは思いである限りは十把一絡げに排除されるべきだという結論にいたってしまうだろう。実際のところ、釈尊自身はそのようなことを少しも言っていないにもかかわらず、そういう先入見を通して経典の文言を理解してしまうというようなことがしばしば起きている。

辞書によると、**santhana**というパーリ語のもともとの意味は「休憩所、会合場所」であるという。だとすれば、この経典の題名である **vitakka-santhana** は文字通りに訳せば「思考の休憩所」のはずである。だから、もう一つの英訳題 **The Relaxation of Thoughts**の方がこの意に近いということになる。**removal**(除去・撤去)と訳したのでは本来の趣旨からはずれてしまう。**removal**と**relaxation**(くつろぎ)とでは「景色」がまったく違ったものになる。もっとも、思考がまったく存在しない「純粹」な心になることを遮二無二目指している人たち(たとえば、前回の論考で触れた神秀や臥輪禅師のような人)にとっては、釈尊が「休憩所で思考と出会う」、「くつろぎのなかで思考に出会う」などということについてまじめに語っている場面を想像することはできないだろう。しかし、この題名を素直に読めば、釈尊はまさにそういうことを説いていると理解するべきなのではあるまいか。つまり、あらゆる種類の思考を憩わせて(無くしてしまおうとするのではなく)、そういう条件のもとで、浮かんでくる「悪しき、不善の思い」に対してどう対処することができるかということを 説いているのであって、沸き起こってくるあらゆる思考とどう戦い、どう打ち勝つべきかを語っているのではないのだ。

この經典のなかで釈尊は五つの具体的対処法を説いている。「比丘がある主題に出会って、意を注いでいるときに」という表現やうまく対処できたときには「内部に心が確立し、定められ、統一され、集中される」という表現から判断すれば、この説法はあきらかにヴィパッサナー（観）ではなくサマタ（止）の行法を行っている修行者たちに向かって説かれたもののように見える。しかし、わたしはこの經典の中に、われわれ坐禅を修行している者にとっても、正身端坐の努力を挫くじくような思いやイメージが沸き起こってきたときにどうするのかという問題に対して有益な指針を見つけることができるのではないかと考えて 読んでいるのである。そのためにも、なによりもまず、この經典の題の意味を **removal** ではなく **relaxation** と理解して読んでいかなければならない。

この經典では、まず、たとえば呼吸に注意を注ごうとしている修行者にしつこく怒りの思いがつきまとしてそれを妨げているような場合は、いったん呼吸に注意を向けるのを保留して、別の善なる思い、たとえば慈悲の思いに注意を向けるようにするという対処法が 説かれる。このやり方については、「ちょうど、熟練した大工やその見習いが、小さな楔（くさび）で大きな楔を取り出して、除きどけるようなものである」という比喻によって説明されている。そして、これによって「悪しき、不善な思い」が手放され鎮まったら再び呼吸に注意を向けるのである。この經典の文脈では、不善な思いに対抗するような「別の善なる思い」を具体的に何にするか、その選択は修行者自身かあるいは指導者によって意図的に、あるいは方法的に決められるのであろうと推測されるが、われわれの坐禅ではそういう人為的な介入はしない。不善な思いが起

きてきたらすぐに注意をこちらで意識的に決めた別な善なる思いに強いて向けかえるのではなく、心のプロセスが別の善なる思いを自然と生起させて心が鎮まってくるまで、その不善な思いと辛抱強く付き合っていくのである。不善な思いも無常の流れの中にある以上、いつまでも存在し続けることは本来不可能なのだ。道元禅師は「煩惱は煩惱それ自身のうちに自分を乗り越える契機を宿している」という意味のことを言っているが、それを借りて言えば「不善な思いはそれ自身のなかにそれを乗り越えていく力を有している」。そのプロセスを妨げさえしなければ、不善な思いという一時的な状態はいつしかよりバランスのとれた状態へと遷移していく。海辺で夢中になって砂の城を作って遊んでいた子どもがそれに飽きてくると何の未練もなくそれを後にして走り去っていくようなものだ。そういうことが起こることを忍耐強く見守りながら許していく、そういう気の長い取り組みを可能にしてくれるのが正身端坐という型だったのである。次に、最初の対処法がうまくいかない場合は、釈尊は「それらの思いの欠点をつぶさに見る」ことを勧めている。これは不善な思いから注意をそらすのではなく、その不善な思いを注意深く観るということだ。「身を飾るのが好きな、若い女性や男性が、自分の首に蛇の死骸や、犬の死骸、人間の死骸が首にぶら下がっていれば、怖がり、恥じて、気分が悪くなるようなものである」という比喻で説明されている。これは思考にあわてて背を向けるのではなく、くつろいだ状態で思考と出会い、それをまっすぐに観るという作業を意味している。それを通して、無理矢理に思考を消し去ろうとするのではなく、当人自身が心の深いところで嫌気がさし食傷して（「怖がり、恥じて、気分が悪く」なって）、自然にその思いから厭離してい

くという運動が起こるのである。わたしは昔、ある接心で、しつこく湧いてくるある思い（性的なファンタジー）をなんとかしようと悪戦苦闘していた（今から考えると、その実、それを楽しんでもいたと思う）が、ある時、そういう劣情をもてあそんでいる自分の姿に思いが至り、

つくづく嫌気がさしてきた。そうするとどういうわけか、止めようとはしていないはずなのに、それが鎮まっていたという出来事があったことを思い出す。

（続く）

国際ニュース

南アメリカ国際布教師会議

期日：2021年9月15日

会場：Zoom

ヨーロッパ国際布教総監部現職研修会

期日：2021年10月9・10日

会場：Zoom

ヨーロッパ国際布教師会議

期日：2021年10月10日

会場：Zoom

秋季ハワイ国際布教師会議

期日：2021年10月16日

会場：Zoom

ハワイ国際布教総監部現職研修会

期日：2021年10月16・17日

会場：Zoom

北アメリカ曹洞禅連絡会議

期日：2021年11月17日

会場：両大本山北米別院禅宗寺
（カリフォルニア州ロサンゼルス）

北アメリカ国際布教総監部現職研修会

期日：2021年11月17～19日

会場：両大本山北米別院禅宗寺
（カリフォルニア州ロサンゼルス）

南アメリカ国際布教師会議

期日：2021年12月15日

会場：Zoom

南アメリカ国際布教師会議

期日：2022年2月11日

会場：Zoom

春季ハワイ国際布教師会議

期日：2022年2月26日

会場：Zoom

南アメリカ国際布教総監部現職研修会

期日：2022年3月3、8、10、15、17日

会場：Zoom

曹洞禅ジャーナル 法眼(年2回発行)

発行所 曹洞宗国際センター

Soto Zen Buddhism International Center

633 Fallon Avenue, San Mateo, CA 94401 Phone: 650-344-4021 Fax: 650-344-4022